

## 都市における街区公園の役割—佐賀市の街区公園を事例として—

佐賀大学 理工学部都市工学科 学生会員 中山 基子  
 佐賀大学 理工学部都市工学科 正会員 外尾 一則  
 佐賀大学 低平地研究センター 正会員 黒澤 武邦

## 1. 研究の背景・目的

都市部の産業化が進むにつれ、都市環境の悪化が問題視されるようになり、改善策として都市のオープンスペースの確保の必要性から公園制度が発達し、公園は目的・規模別に多様化してきている。その中でも、私たちの身近な街区公園は、児童公園から改名され遊具設置規定もなくなり、その機能も変化、多様化していると考えられる。そこで、既存公園の再整備・有効活用への指向の高まりからも、都市における街区公園の役割を再認識する必要があると考えられる。

本研究では、公園とその周辺環境から見た街区公園の多様な機能を把握する際、公園周辺区域・街区区域・市街地領域の3つのレベルに分けて捉え、街区公園の役割を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究概要

佐賀市の街区公園の把握・実地踏査を行い、それぞれの公園と周辺環境の現況を観察し、上記の3つのレベルを関連づけながら街区公園のあり方を明らかにしていく。その際、佐賀市の豊富な水系を「際」と「ネットワーク」の要素として捉えていくこととする。

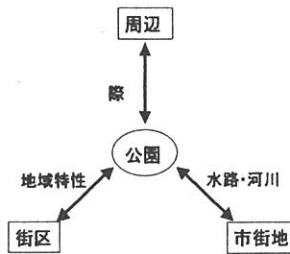


図-1 各レベルと公園の関連要

## a: 周辺レベル

街区公園において周辺との関係を考慮する際、公園との接線である「際」が重要であり、その役割的要素の把握を行う。また調査に基づき、公園を周辺要素からタイプ分けを行い代表例を挙げ、街区公園の機能を示す。

## b: 街区レベル

タイプ分けした公園周辺地区の住民にアンケートを行う。アンケート結果から、住民意識による街区公園の評価の分析などからタイプ別の特徴・問題点などを明らかにしていく。

## c: 市街地レベル

水辺の「ネットワーク」から佐賀市内に点在している街区公園に関連性・連続性が存在するのかが佐賀市の特性として捉え、点としてでなく線としての市街地における役割を考察していく。

## 3. 公園のタイプ分類

佐賀市内には28箇所街区公園が設置されている。現地踏査を行うと、住宅地の路地奥にあり見つけにくく周辺空間がより狭まっている公園と、幹線道路や比較の見つけやすい場所にあり周辺空間が開放的な公園が見受けられた。そこで、前者を「閉鎖型」、後者を「開放型」と定義し、分類を行う際の一つの軸とする。

また、周辺環境から水路に焦点をあて、水路形態から水路と接している公園を「接触型」、接してはいないがすぐ近くに水路がある公園を「近接型」、周辺を水路で囲まれている公園を「包囲型」、接触型と近接型の両方の水路を持つ公園を「混合型」と定義し、もう一つの軸とする。

すなわち、本研究は二つの軸から街区公園を8つに分類し、それぞれの一つずつ28個の街区公園の中から代表例としての公園を一つずつ挙げ、街区レベルにおいて行うアンケート調査の対象公園とする。

## 4. 街区公園の特徴

## 4.1 調査の概要

アンケート調査は、対象公園を中心に250m圏内の街区居住者と実際の公園利用者に対して行った。回答者はアンケート内容を理解でき公園を利用したことのある個人とし、居住者に対しては回収日を指

定したダイレクトメールにより実施した。その際アンケート用紙は1世帯に2部配布し、周辺に住宅が少ない公園でもなるべく多くの回答が得られるようにした。利用者に対してはその場で記入してもらい回収を得た。アンケート実施時期は2002年12月下旬～2003年1月上旬である。設問項目は、利用者の属性、利用実態、際の役割・公園周辺の水辺の役割など計10個である。タイプ別の回収結果を表-1に示す。

表-1 アンケート回収結果

タイプ分類	公園名	配布部数	回収部数	有効回答部数	回収率	有効回答率	
開放型	接触	堀江公園	48	28	20	58.3%	71.4%
	近接	大藤公園	70	28	25	40.0%	89.3%
	包囲	大財公園	46	33	20	71.7%	60.6%
	混合	北川副南公園	24	24	20	100%	83.3%
閉鎖型	接触	昭栄公園	60	42	29	70.0%	69.0%
	近接	東中野公園	66	42	28	63.6%	66.7%
	包囲	西大島公園	47	26	21	55.3%	80.8%
	混合	下田公園	50	42	23	84.0%	54.8%

#### 4.2 利用実態

タイプごとの利用頻度の割合を開放型と閉鎖型に分けた結果を図-2に示す。開放型に比べて閉鎖型の公園利用の頻度が明らかに多いことが分かる。ま

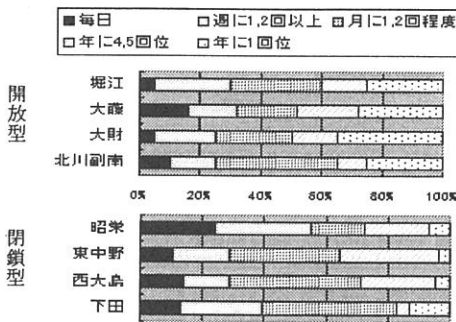


図-2 タイプ別の利用頻度

た利用目的の内容を総合した図-3を見てみると、線的行動である散歩や、通り抜けを目的としている割合が大きく、個人よりも地区行事などによる地域交

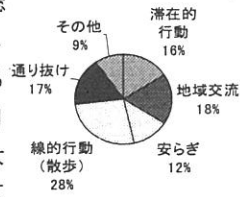


図-3 利用目的(総合)

流の場としての潜在的利用の割合がわずかに大きいといえる。

#### 4.3 周辺の水辺イメージ

図-4は公園周辺の水辺のイメージを水辺の軸から4つにタイプ分類し、水辺の位置によるイメージがどう変化しているかを表した。水辺と少し離れた位置関係にある近接型の公園では、「快適な感じ」と回答した割合が非常に大きく、また「景観構成に役立っている」などプラスイメージを持つ利用者が多いと考えられる。

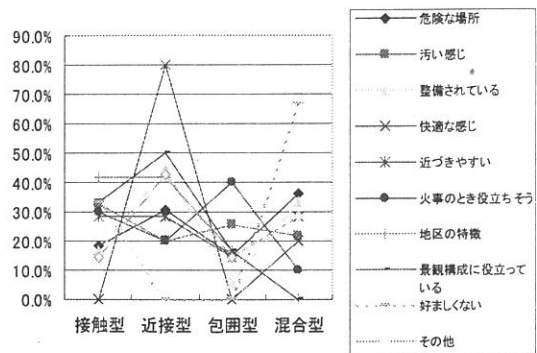


図-4 水辺の位置とイメージの関連

#### 5. 公園と水のネットワーク

佐賀市の街区公園分布と水路網を示す図-5からも、公園と水路は位置的に関連性があり、市街地において、公園と水のネットワークとして機能していく可能性があると考えられる。



図-5 公園分布と水路網

#### 6. まとめ

以上より、街区公園は住宅地においてある程度閉じられた空間にあるほうが利用頻度が多くなる傾向が見られる。また水辺を近くに持つ公園は、水辺のイメージが悪いという割合が大きくなり、今後整備による公園と周辺環境の改善が望まれる。